Wilmington地区の研修の報告と若干の考察

大阪地区・Wilmington地区コーディネータ
大阪教育大学教育学部　助教授　　森　田　英　嗣

1．研修の概要

(1)　参加者

Wilmington地区への三回目となる今回の研修には、次の方々が参加した。UNCW (University of North Carolina, Wilmington校) のDr. Walker氏コーディネートのもとで訪問した現地の学校ごとに紹介する。また（　）内に所属学校名を示す。

Leney High School
　敷田冨治美教諭（大阪府立守口北高等学校）
Hoggard High School
　片岡雅子教諭（大阪府立花園高等学校）
Ashley High School
　吉岡　宏教諭（大阪府立池田高等学校）
Topsail Middle School
　小林孝泰教諭（八尾市立東中学校）
Virginia Williamson Elementary School
　藤本政信教頭（高槻市立樫田小学校）
　森重章子教諭（東広島市立御薗宇小学校）
　高井延子教諭（東大阪市立荒川小学校）

このうち、Hoggard HSと花園高等学校、Virginia Williamson ESと御薗宇小学校、さらに樫田小学校の間では、すでに姉妹校としての交流協定が結ばれている。

(2)　研修のスケジュール

今回の研修も、過去二回の研修とほぼ同じスケジュールで計画で行われた。以下、【　】内に筆者の感想・考察を添えながら報告したい。

8月16日（金）：大阪にて直前研修

【これ以前に大阪からの派遣教員については三回の事前研修会が行われた。内容はノースカロライナ州の教育事情、現地学校での観察と記録の仕方、個人プロジェクトのあり方など、現地の学校での研修をスムーズに進展させるための内容であった。直前研修では、広島、鳴門地区からの参加教員とはじめて顔を合わせた。多少緊張気味であったが、各人がそれぞれの関心、個人プロジェクトについての発表をすると、似たようなテーマがあることが分かったりして、個人的に情報交換している姿なども見られた。】

8月17日（土）：関西空港から出発　デトロイト経由でローリー着

【新大阪のホテルを出てからWilmigton市内のホテルに到着するまでおよそ24時間の長旅であった。】

8月18日（日）：休息、Dr. Walkerの案内によりWilmigton市内の観光

【日曜日の午前中、街中は人気がなくひっそりとしていた。街を歩いていると少しずつ市民が教会から出てくる姿も見え始め、伝統的な南部のアメリカ社会であることを実感した。学校だけでなく、学校を取り巻く地域社会の様子を知ることも学校を理解するための大切な体験となる。】

8月19日（月）：全員でHollytree Elementary School、Williston Middle School、Ashley High Schoolを訪問。また、Dr. Walker宅にてホーム・パーティ。

【日本でも担当外の校種を訪問することは希であるため、小学校から高等学校までの全体の様子をつかむによい機会であったように思う。また、Dr. Walker宅でのホーム・パーティも米国の家庭や家族を知るよい機会となった。】

8月20日（火）～22日（水）：各人が(1)で述べた現地学校にそれぞれ訪問し、観察や個人プロジェクトの実施を行う。この間（19日も含め）、18時からは毎日全員でその日に観察したこと、持った感想、分からなかったことなどを交流し合うリフレクション・ミーティングを1時間から1時間30分ほど行った(図1)。

【それぞれにいろいろな観察があり、話し始めるとなかなか止まらない場面も多かった。コーディネーターとしては全員が前向きでいること、重要な観察を数多くしていることを確認できとても興味深い時間であった。これらの会議の内容は全てVTRに記録した。この資料はのちの研修に役立てたいと考えている。参加教員が何に注意し、何を考えたかは、外国

図1　リフレクション会議の様子

での教員研修のカリキュラムを考えるときの貴重な情報源となるだろう。】

8月23日（金）：サマリー・ミーティングでの発表内容と資料の作成

【夜にはDr.Walkerと現地受け入れ学校の教員から、南部独特のパーティであるというPig Picking Partyに招待された。ここでは、現地の受け入れ学校の教員同士も一堂に会し、互いの受け入れの様子、日本の教育改革の事情などの情報交換も行われた。受け入れ教員の家族も参加し歓迎の雰囲気に包み込まれた、とてもあたたかいパーティであった。】

8月24日（土）～25日（日）：ホームスティ、その後ローリーに移動

【参加教員は受け入れ家庭にてそれぞれにホームスティを楽しんだ。受け入れていただいたのは、すべて教員の家庭であったのも、訪問が楽しめた理由であった。コーディネーターである筆者も、ともに異文化の中の家庭を体験した。】

8月26日（月）：サマリー会議

【各地区に派遣された教員がそれぞれの経験、考察を日本語と英語にて発表した。異なる地区に派遣された教員がどのような経験、考察を行ったか、互いに興味深く聞き入る姿が印象的であった。また、会議の中で、大阪府立守口北高等学校と Leney HS、つづいて八尾市立東中学校とTopsail MSの交流協定文書への調印式が行われた。更に学校を単位とした交流にどのような実践があるか、どのような方法が有効かの情報提供を米国側から受け、将来の交流を思い描いた。】

8月27日（火）：Exploris 博物館と Exploris Middle Schoolを訪問

【Exploris MS は文化をテーマとした博物館立のチャータースクールである。私たちの一行は3～4人の小グループに分かれ各グループが2人の中学生に案内してもらい学校巡りを行った。外国人教師を案内するという大役を、緊張しながらも見事にこなした中学生達の達成感に満ちた顔が印象的であった。】

8月28日（水）：離米

2．サマリー会議での発表内容

各参加教員の体験や考察については、それぞれのレポートを見ていただくこととして、ここではサマリー会議の内容について取り上げておきたい。というのも、サマリー会議での発表内容は、参加者が約1日をかけてその体験と考察を共同でまとめたものであり、参加者の体験の基盤的認識として記録にとどめるべき内容であると思われるからである。

Wilmington グループによるサマリー会議での発表は、以下の三つの視点から話しが組み立てられ、発表された。ここでも【　】内に筆者の考察を示しながら紹介したい。また、図2～図12に発表の際に用いられたスライドを示した。

(1)　子どもは子どもであった

参加教員は、授業を中心とした観察のみならず、自ら米国の子ども達を相手にした授業をおこなった（小学校で折り鶴、紙鉄砲づくりの紹介、中学校でそろばんの授業、高校で日本文化の紹介として梅干しを食べてもらったり、ルーズソックスの紹介などの授業実践をおこなった)。こうした経験を通して、得られた共通の印象の一つは、「子どもは子ども」ということであった。どちらの国にも、実に熱心で積極的に授業に参加する子どもがいる一方で、さめた眼差しを向ける子ども達、「がちゃな子」、ユニークな子どもなどが一つの教室の中に混在していた。また、授業に対する子どもの反応も、日本の場合と実によく似ており、子どもを観察する限り、日米間の差異よりも、共通点が多く見えた。(図2～図5を参照)

【これは、筆者の個人的な印象とも大きく重なる考察であった。大人を見る限り、米国人と日本人とでは感じ方、思考様式などで異なることが目に付くが、

図 2

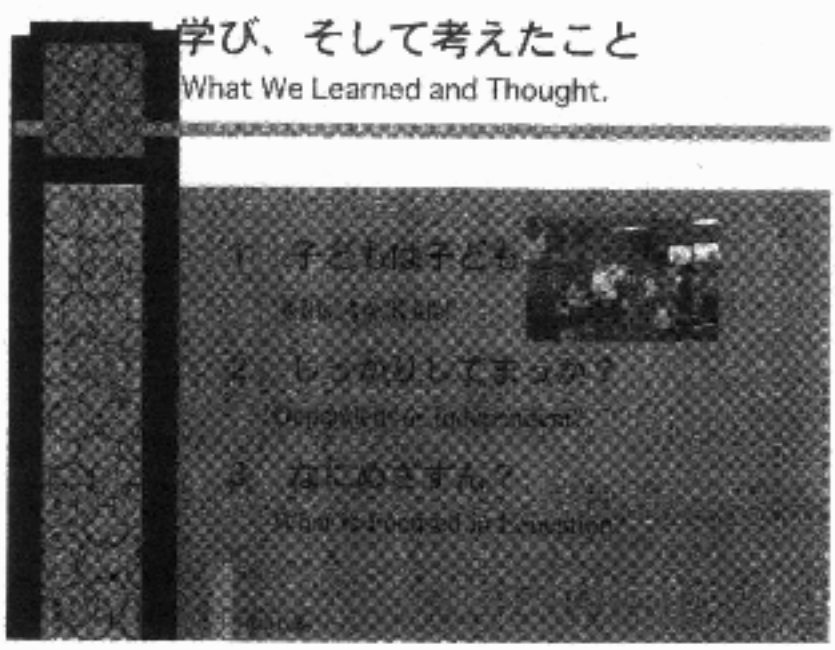

図 3

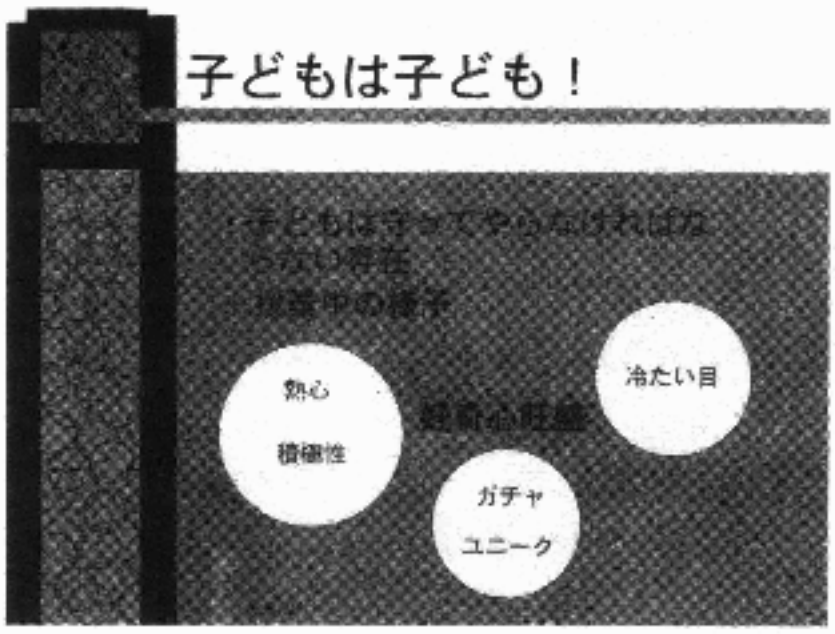

図 4

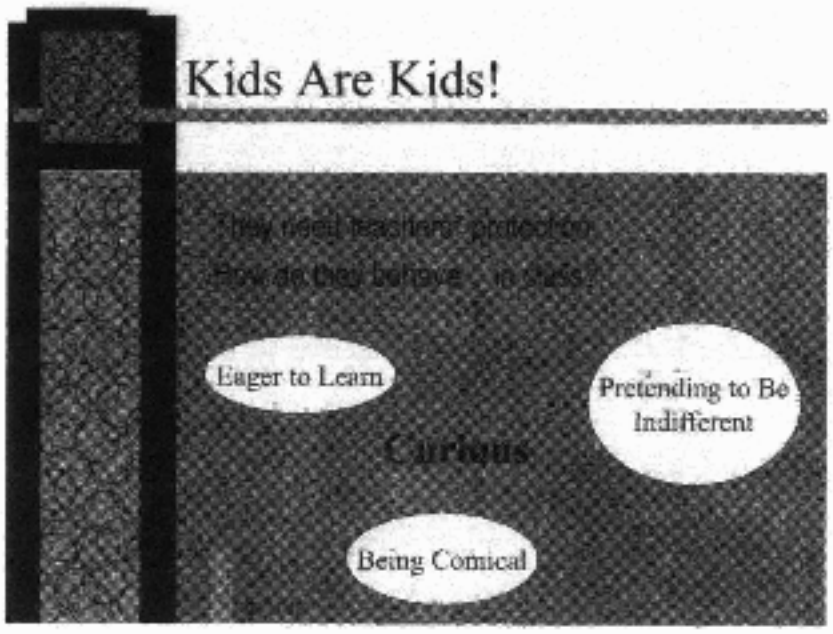

図 5

子どもにはそうした差異が感じられないことが多い。では、日本人はいつ日本人的になり、米国人が米国人的になるのか、これはとても興味深い問題であろう。もちろん、日米の子どもの間に思ったほどの差異が感じられないのは、見かけ上のことである可能性もある。なぜなら、私たちは教師として、共通に相手を児童あるいは生徒という立場に立つ者と見なしており、子どもの方も私たちを教師という立場に立つ者と見なして行動するからである。この場合は、両者の共通性は、内面を反映したものというよりも児童あるいは生徒という共通の立場から創り出されたものということになる。いずれにしても、そのように感じられる理由は何か、今後の研究テーマとして実に興味深い。】

(2) 自立しているかどうか

しかし、学校内での子どもの扱われ方には、大きな違いも見られた。それは、「自立」という点から考察すると分かりやすいように思えた。たとえば、観察した小学校では、廊下を一列で並んで歩かせたり、トイレに並んでつれていったりすることが行われていた。また、日本で通常使わせているような理科の実験器具を扱わせないなどのことも注意を引いた。また、小学校から高校までの全ての校種で子どもに掃除をさせていなかったし、また小学校と中学校で教師または大人が常に子どもと一緒にいなければならなかったことは驚きだった。授業中トイレに行くのにパスポートにサインしなければならないことなどはとりわけ大きな驚きで、日本の教師からすれば、自分でできることではないか（子どもに任せてよいのではないか）と思うことも多くあった。こうした点からすると、米国の子ども達は自立的でなく、依存的に育てられようとしているようにも思えた。

その反面、アカデミックな部分については、たとえば自分の意見をはっきり言うなどの指導がなされており、日本の子どもよりも自立的に扱われることが多いようにも思えた。とりわけ高校では、シニアプロジェ

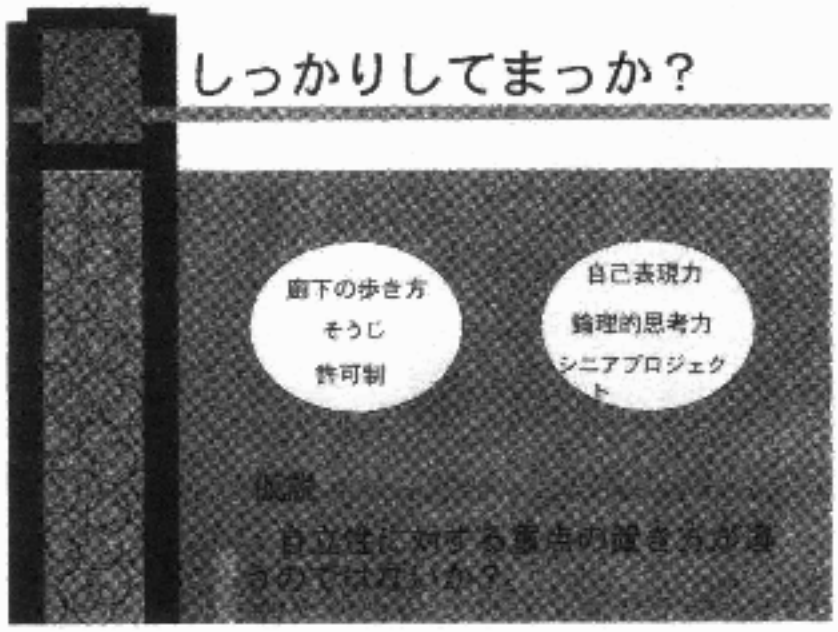

図6

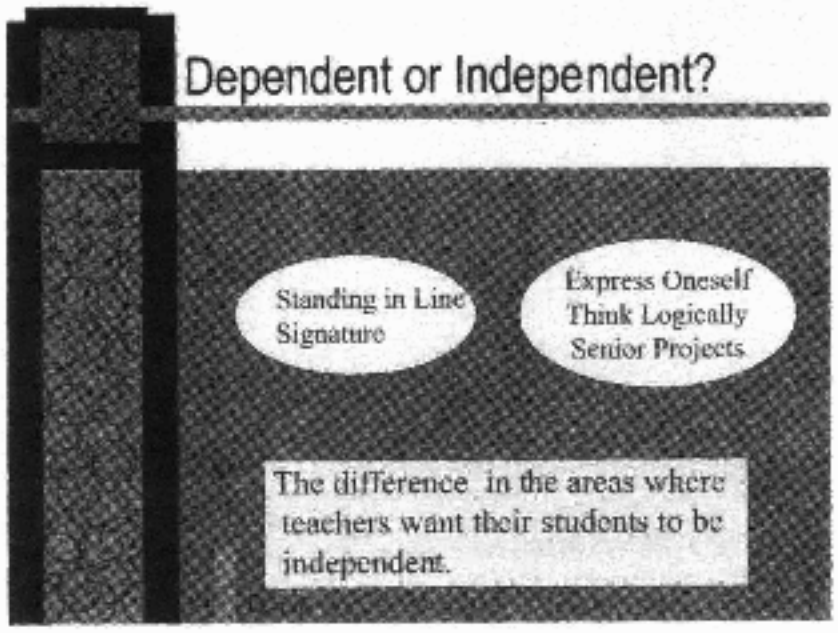

図7

クトがなされ、自ら課題を見つけ、学習していく自立的な姿が印象的であった。自己表現の力もそだっており、この点に関しては日本の子どもは弱いと感じられ、自立しておらず、依存的なように感じた。

こうしてみると、米国では学業領域で自立的であるように求められることが強調され、日本では社会行動の面で自立するように求められるという整理も可能であるように思われた。その意味では、どちらがより自立的かということは一概には言いにくく、むしろ両国とも子どもの自立性を育てようとしているが、力点をおく領域が異なるというふうに考えることが可能ではないか。(図6～図7を参照)

【東洋 (1994) は、日米の子育てを比較する中で、日本型の子育ての特徴を「いい子主義」「気持ち主義」という概念を用いながら記述している。それによると、日本型の子育ては、米国の特質である「原理原則」を外的な大人の力によって守らせるという方法よりも、相手の気持ちを思いやる習慣やいい子とはどういう子であるかという内的行動規範にもとづいてセルフコントロールさせていく方法であると説明されている。サマリー会議での Wilmington グループの考察は、東が観察したような家庭での子育てのあり方が、学校教育の中でも踏襲されていることを示唆する点で興味深い。】

(3) 教育の重点目標

こうした視点から、日米の教育の在り方を見直してみると、日本の学校教育では学業面だけがことさら強調されるわけではなく、「知育、徳育、体育」といわれるように、知育がその他の徳育や体育との関係の中で考えられているように思われる。これに対して、米国NCでは、小学校の段階で日本の道徳教育と親近性を持つキャラクター教育に力を入れ始めているとはいえ、かなりの程度学業面での発達、成果が学校教育の主要な目的になっていると言えそうだ。

とはいえ、「教師は教師」と言えるのも事実で、子どもの教育に対する思い、情熱はどちらの国の教師も同じように持っているという印象を強く持った。(図8～図12を参照)

限られた滞在、体験から印象をもったが、以上の考察を、これから両国の特質を考える出発点としたいと考えた。

【公教育の役割にどうしてこのような差異が生じているのか。両国での学校の役割、学校が作られたときの世界・社会状況などが大きく関係する問題だと思われる。たとえば、Cummings (1997) によれば、日本をはじめとする東アジアの国々は公教育を作る必要性をまずもって欧米の列強からの圧力に抗し、同等の競争力をもつ点に求めた。しかし、単なる欧米の科学・技術の導入は、国民やその国の文化の欧米化を意味するために、人格教育、道徳教育を行う中で、その国の伝統、国民、民族としての誇りを学ばせようとするカリキュラムを作り上げたのだと考察している。和魂洋才という言葉がまさにその状況を象徴するといえよう。いずれにしても、学校教育に期待される役割は両国で異なっており、それがカリキュラムのあり方にも影響していることを確認するのは、私たちの国の教育改革のあり方を考察する上でも、とても興味深く、また重要なことであろう。そして、これらのことを、現場の教員が気づき、考える機会を提供しているという点で、GPS教員研修

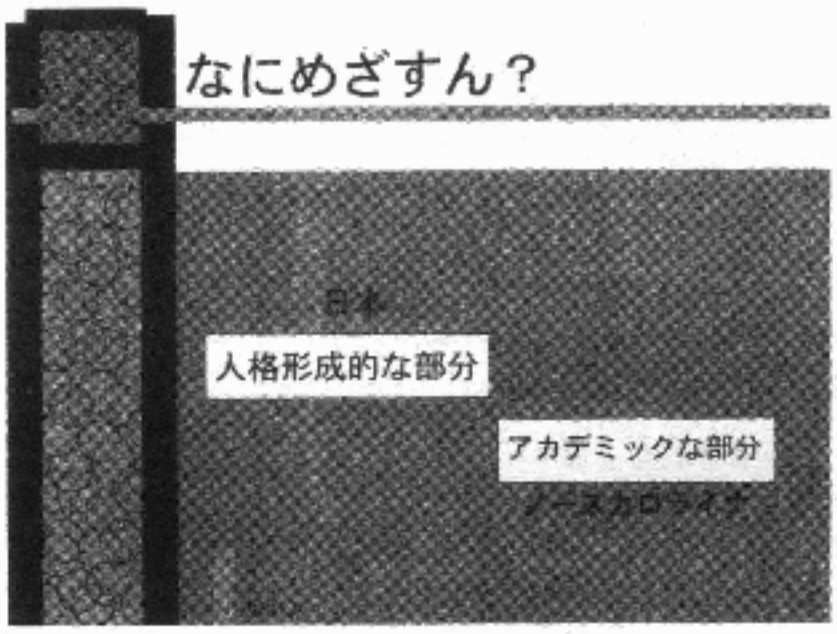

図8

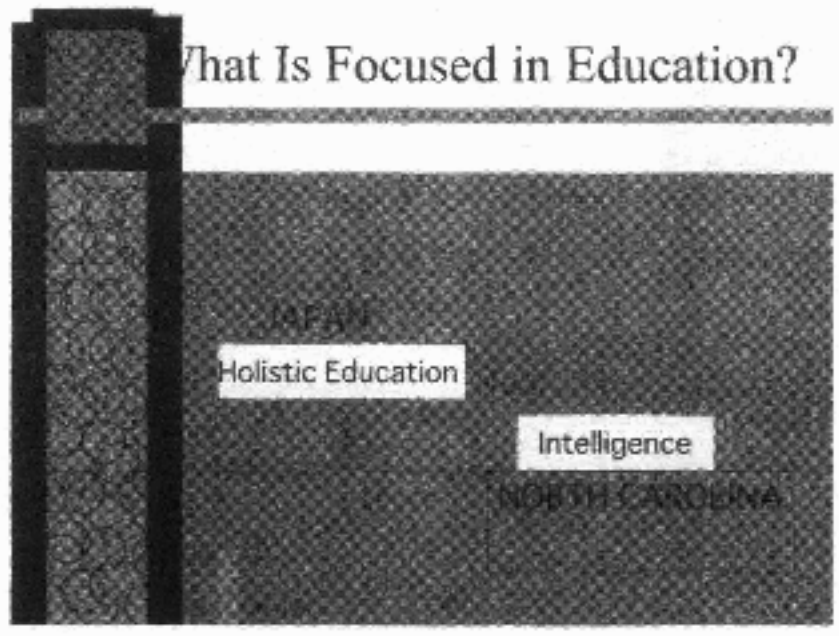

図9

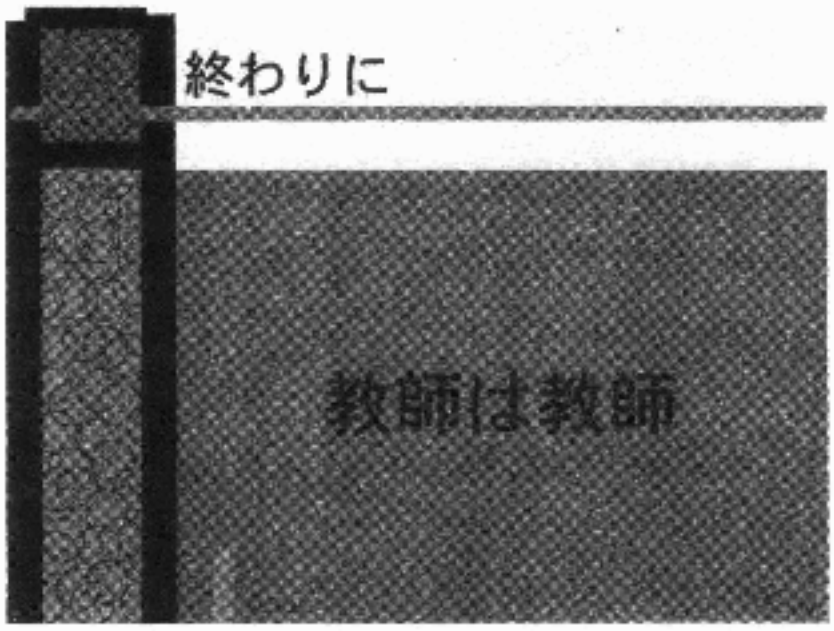

図10

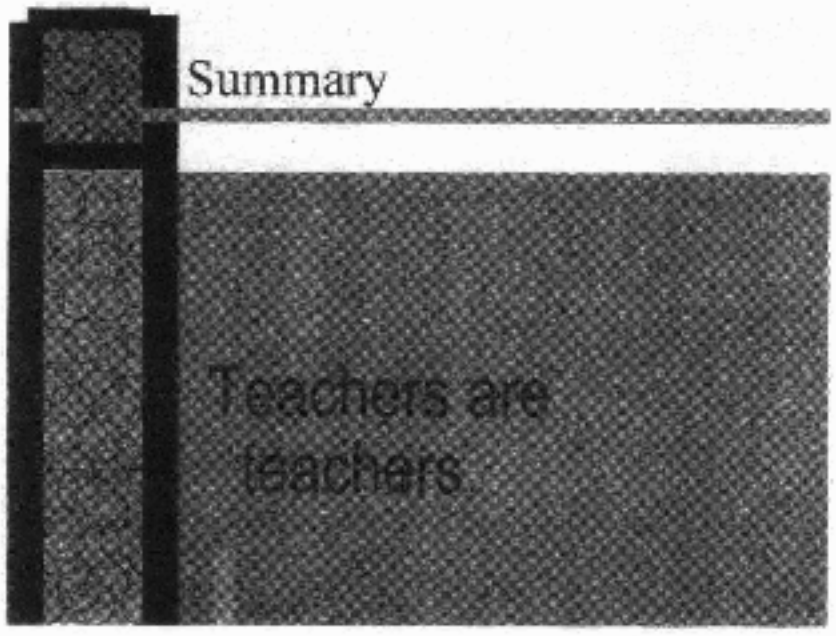

図11

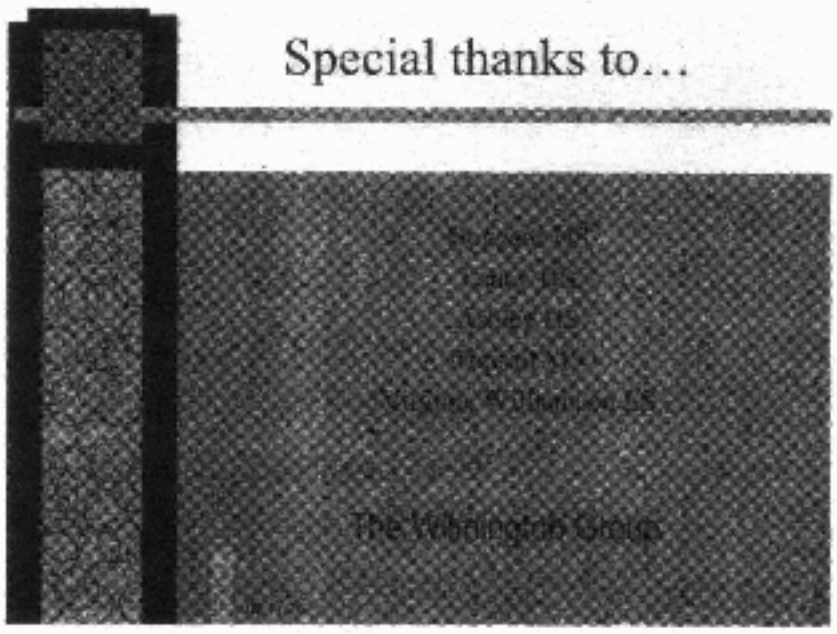

図12

プログラムの可能性を認めることができるように思われる。】

引用文献

東洋 (1994).『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、東京大学出版会

Cummings, W. K. (1997). Human Resource Development : The J-Model. In W. K. Cummings & P. G. Altbach (eds.), *The Challenge of Eastern Asian Education.* New York : State University of New York Press.

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2002年８月17日－８月29日）

大阪府立守口北高等学校　教諭　　**敷　田　冨治美**

８月17日（土）

前日の夕刻（17：00 ～ 19：00）とこの日の午前中（９：30～11：30）の、文字通り直前研修を終え、大阪コロナホテルより関西国際空港へ。そして、いよいよ米国へ向けて、同空港を午後４時25分に出発し、現地時間の８月17日（土）午後３時25分にデトロイト空港に到着。ここで国内線に乗り換えて、午後５時15分に同空港を出発し、目的地ラレーに到着したのが午後６時45分であった。そこから、ドクター・ブラッド・ウォーカー氏運転の車で、途中、マクドナルドで夕食を済ませた後、滞在ホテルのコーストライン・インへと向かった。そして、なんと到着したのは午後11時30分。しかし長い１日はそれでもまだ終わらず、森田先生の部屋で、延々と夜中の３時過ぎまで教育談義（?）が続き、ようやく自室へ帰って眠りについた。米川先生、森田先生、最後までおつきあい頂き、本当に感謝に堪えません。

８月18日（日）

この日は１日中オフで、午後からショッピングセンターや文具店オフィス・デポへ寄り、ＵＮＣＷを見学した後、ライツヴィル・ビーチへ。ここでウォーカー先生に、一般的に言ってアメリカの生徒は日本の生徒よりも自立していると言えるのではないかと質問を投げかけてみるが、意外にもウォーカー先生はその逆で、日本の生徒の方がより自立していると思うとおっしゃった。そして、この米国現地研修での学校観察を経てから、もう一度この問題について話し合いましょうということになった。

８月19日（月）

午前８時30分にホテルを出て、全員で、午前中はウィリストン・ミドル・スクールとグレゴリー・スクールの２校を、そして午後はアシュレイ・ハイスクールを訪問した。

ウィリストン・ミドル・スクールに到着したのは午前８時50分。校長のウィリアム・ハッチ先生は眼光鋭く、とてもきびきびと動き回られていた。「生徒は６年生から８年生までで、その数約900人。うち、白人が55％、黒人が42％、ヒスパニックが３％という人数構成で、教員数は約60人。各教室には５台のコンピューターが設置してあり、さらにコンピューター・ラボが４室ある。」との説明であった。ハッチ校長先生は、学校はコンピューター化されているがプリント類も必要に応じて配布しているので、この点もよく観察してほしいと要望された。私自身、実際に教室等を見せて頂いて、まずは日本との設備の違い、授業規模（受講人数）の違いに歴然としたものがあることを改めて認識した。最初に見学した、外国人のための第２外国語としての英語の授業では、受講生徒はわずか４人。次の美術の授業もコンピューターの授業も、ほとんどの授業が20人ほどの生徒を相手に行われていた。体育は約50人の生徒がいたが、担当教員は２人なので、平均するとこれも25人になり実に羨ましい限りである。ただ、授業のレベルはと言うと、例えば６年生対象のあるクラスでは大きな数について学んでいたし、同じく６年生対象の別のクラスでは四捨五入についての学習であったりと、必ずしも高度なレベルではないこともわかった。また、７年生対象の科学と数学を融合した授業では、各自が制作した紙飛行機を飛ばして、その飛距離の統計をとっていたが、これなど日本ではなかなか見られないような授業形態ではないかと考えさせられた。

この後、午前10時30分に、２校目のグレゴリー・スクールを訪問した。こちらは児童数565人の規模の公立の小学校であり、学区制を敷いておらず、数学、科学及びテクノロジーに特に力を注いでいて、これら３教科には専門の教師を配置しているとのホリデイ副校長の弁。校内を見て回ると、ここでも各教室に５台のコンピューターが置いてあり、30台のコンピューターが設置されているサイエンス・ラボで、全生徒に対し毎週２回、専門の先生によるコンピューター教育が施されているそうである。１クラスの規模も日本に比べて断然小さく、Ｋと１年生に対しては特に手厚くて、１クラスあたり22人の児童をクラス担任と補助教員の合

わせて２名で指導に当たっているとのこと。３年生になると、補助教員は複数のクラスに対し１名となるが、１クラス規模は26～28人。４・５年生では補助教員こそいなくなるが、それでも１クラス規模は26～28人で、授業に際しては他に１名の教員が入り込んで、ティーム・ティーチングを行っているらしい。また、数学などでは、特に優秀な子供の場合はミドル・スクールで学ぶ機会が与えられ、日本ではまず不可能な、いわゆる「できる子」に対する教育の保障も行われているようである。なお、教員と補助教員の役割分担ははっきりしており、教育の分業化が進んでいることもわかった。児童を観察していて特に目を引いた点は、教室移動の際には必ず教員が引率し、児童はきちんと一列になって歩き、トイレに行くのでさえも教員が付き添い、児童が整然とトイレの順番を待っていたことである。小学校の敷地に一歩入れば、児童を、休み時間といえども四六時中監視し、児童の安全に万全の対策を講じている学校の姿勢に対して、日本との間に大きな隔たりを感じずにはいられなかった。また、問題行動が起こった場合の指導手順が明確に示されていた点も興味深く思った。ちなみに第１段階はWarning（警告）、第２段階がTime-out（別室指導）、第３段階がTeacher slip（担任へのメモ連絡）、第４段階がCall parent（保護者召喚）、そして最後の第５段階がOffice Referral（教頭説教）ということであった。さらに、５年生の中から優等生として選ばれた児童が低学年の児童の世話をするという、リーダーシップ・グループの存在も、ユニークな点として印象に残った。

午後からは、アシュレイ・ハイスクールを訪問した。創立２年目の新しい高等学校で、９年生から12年生まで、生徒数約1,600人、教員数約80人の規模の公立高校である。８月というのに、一歩校舎内に入ると寒いくらい冷房が効いていて、まずは日本の高校との学習環境の違いにしばし唖然。授業規模も、ここでも日本とは比較にならないほどの少人数制であった。三角関数の授業が28人、世界史27人、物理20人、ハンドソーイング29人……。日本の１学級40人は、やはり多すぎると改めて思った。興味を引いた授業は物理学。計算を使わないで物理を理解するというのが趣旨であるらしく、また授業内容も大学レベルと聞いた。９月６日に行われるPhysics Bridge Building Competitionに備えて、ポップキャンディーの棒を利用して橋を造っていた。カリキュラムに関して、日本と大きく異なると思ったのは体育の授業である。日本の高校では必ずと言っていいほど、１学年から３学年の全学年にわたって、週あたり３時間程度の授業配当が行われ、しかも必修単位となっているが、ここでは４年間で１セメスター分の単位を修得すればよいということになっている。その代わりといっては何だが、半年間は毎日体育の授業に出なくてはならない。体育の授業は、体力向上及び健康増進の観点から、どの学年でも学ぶのが常識と思ってきたが、こちらでは他の科目同様、集中的に学習するようだ。授業以外の学校のシステムにおける日本とアメリカの決定的な相違点は、シェリフと呼ばれるスクール・ポリスの存在だろう。通常、ミドル・スクールでは１名、ハイスクールにおいては２名のシェリフが常駐しているそうだ。ここアシュレイ・ハイスクールも例に漏れず、２名配置されていた。また、生徒に対する管理体制の徹底という点も特筆すべき相違点と言えるだろう。さすがに高校では、小学校のように教員が生徒をトイレへ引率するというようなことまではしないが、授業中に教室を出る際には必ず、担当の先生にカードにサインをしてもらわなければいけないシステムになっていた。

さて、この日の夕刻は、ドクター・ウォーカー氏のご自宅でディナー・パーティーが開かれた。おいしいご馳走と手作りのデザートをいただいて全員大満足。昨日からの懸案事項である、日米どちらの生徒の方がより自立しているかについて、ウォーカー先生に、今日の学校観察を通して気づいたこと、すなわち、小学校において児童が整然と教室から教室へ移動する様子や、日本では考えられないほど積極的な授業中の意見発表などから、やはりアメリカの生徒の方がより自立しているのではないかと述べたが、この日も結局、結論は出ないままであった。

８月20日（火）

午前７時30分に、元ホガード高校の司書であったルー・キャナンさんがホテルまでピックアップに来てくださった。いよいよレイニー高校訪問である。ドクター・リック・ホリデイ校長先生に挨拶をということで米川先生が午前中しばらくの間はご一緒してくださることになりホッとするが、それでも緊張は隠せない。８時20分にレイニー高校に到着。すでにかなりの生徒

が登校。昨日のアシュレイ・ハイスクールに比べると、黒人の生徒の割合が少し多い感じがした。窓口になってくださったブレンダ・オールソン先生にお会いし、まずは校長先生に挨拶。その後、ライブラリー・メディア・センターへ。すぐに写真を撮り、その場でIDカードを作成してもらった。今日から3日間の訪問中は、これを首からぶら下げておくことになる。ほどなく朝の全校放送が始まり、ホリデイ校長先生が、日本人教師が学校訪問に来ていることを伝達。

この後、ディーンズ・オフィスへ。レイニー高校ではシェリフが3名常駐していることを知る。教師用ハンドブックを見ると、1日間から10日間、そして最長365日間にわたる停学等を含む、細かい懲戒規定が載っていた。

いよいよ9時40分から、授業見学。レイニー高校の通常の時程は以下の通りである。

Warning Bell	6 : 55 a.m.	
Flex	7 : 00 a.m. − 8 : 30 a.m.	(90)
Period 1	8 : 35 a.m. −10 : 10 a.m.	(95)
Period 2	10 : 15 a.m. −11 : 45 a.m.	(90)
A Lunch	11 : 45 a.m. −12 : 20 p.m.	(35)
Period 3A	12 : 25 p.m. −13 : 55 p.m.	(90)
Period 3B	11 : 50 a.m. −13 : 20 p.m.	(90)
B Lunch	13 : 20 p.m. −13 : 55 p.m.	(35)
Period 4	14 : 00 p.m. −15 : 35 p.m.	(95)

まずはシェリー・ニヴン先生の12年生対象のシニア・プロジェクトの授業。日本の大学における卒論研究に近い科目と言えるが、英語科の教員と、メンターと呼ばれるプロジェクトのテーマに沿って選ばれた教員と、地域社会の人々が協力し合って指導・評価に当たるという、日本の高校にはない極めてユニークな科目である。

続いて覗いたのが、比較的重い障害を持つ生徒の授業である。4名の障害を持つ生徒に対し、2名の教員が熱心に指導に当たっておられた。健常者と障害者を分けることなく、同じ学校で教育していくという、アメリカの学校教育の根幹に関わる基本姿勢を垣間見た思いがした。

この後、オールソン先生とともにカフェテリアへ行って、昼食用のハンバーガーやサラダ、デザートなどをお盆に取り、ティーチャーズ・ルームに戻って食事を済ませた。カフェテリアは生徒2,000人が一度に利用できるほどのスペースはなく、A Lunchは11 : 45 a.m.−12 : 20 p.m.、B Lunchは13 : 20 p.m.−13 : 55 p.m. というように、2交代制で生徒の需要を満たしているのが現状である。

午後からは、第3時限に、クリエイティヴ・ライティングと地球科学など3つの授業を見学した。クリエイティヴ・ライティングの授業では、わずか12語からなる次の詩

The reeds give way to the wind and give the wind away.

を、テイバー先生がゆっくりと2度朗読した後、次のように発問し、

What is the mental picture for you?

そして、生徒たちに各自の心に描いたイメージをノートに書くように指示を与え、それを自由に発表させ、先生がその1つ1つに対してコメントを加えていた。大阪の高校では、本校を含めて50分を1コマとしているところが多く、果たして90分という長い時間を、いかに退屈させることなく授業の組み立てを行うのだろうかと興味深く見ていたが、教師が生徒に質問を投げかけ、生徒が考え、発表し、それに対して教師がコメントをするという授業形態だと90分の授業時間も決して長すぎることはないということがよくわかった。

次の地球科学の授業では、酸性雨が豆の発芽に与える影響について、グループごとの実験結果をもとに報告書をまとめ、提出させていた。生徒に尋ねてみると、実験を開始したのは昨日の授業だと言っていた。また、いくつかのグループのレポートを見せてもらったが、その内容はかなりしっかりとしたものだった。しかし、気になる点が全然なかったわけではない。その1つは生徒の授業態度で、教室の壁には、

Rules　1) RESPECT　2) ORDER

と、掲示されているにもかかわらず、授業中に立ち歩く生徒がいたことである。最初のうちは先生も注意をされていたが、最後の方で復習プリントに取り組ませている時にはその数が4〜5人に上り、まだ新年度が始まって1週間そこそこというのに早くも授業崩壊かと思わせるような、危機的状況を垣間見た感じがした。そしてもう1つは、せっかく復習プリントをさせながら、提出の必要がないという点であった。実はこの授業だけではなく、昨日訪問したグレゴリー・スクールでも、児童に対して夏休みの宿題の提出は求めないと

おっしゃっていたが、生徒のやる気を引き出し、かつ授業内容の定着を図るということを考えると何とも納得しかねるのである。

第4時限は実にたくさんの施設や授業を見学した。前半は芸術棟をアラン・ボイド先生に案内して頂き、美術やコーラス、バンドについて説明を受けた。また、後半はラス・アダムズ先生が体育施設を案内してくださり、レイニー高校の卒業生で、バスケットボールのスーパースターであるマイケル・ジョーダンの写真が飾ってある体育館を始め、陸上競技場や、ダンス及び筋力トレーニングの授業風景などを急いで見て回った。

8月21日（水）

午前7時30分に、エンジェル・カヴェンダー先生がピックアップに来てくださった。車中で、レイニー高校の生徒について尋ねてみた。すると、レイニー高校に通う生徒のうち5％程度が特別にハイレベルの生徒で、ローレベルの生徒は約15％、残りの80％が平均的な生徒であるとのこと。そしてハイレベルの生徒に対しては、早朝のフレックスの時間（7：00 a.m.－8：30 a.m.）に授業を行い、ローレベルの生徒に対しては、課題を与え、自宅学習をさせるように指導しているそうである。また、クラブ顧問という制度があるのかどうか尋ねたところ、この学校での勤務年数が3年未満の教師はクラブ顧問を引き受ける必要はないが、それ以上になるとクラブの面倒も見なければならないとの説明であった。そして、その手当は年間で400ドルだと教えてくれた。アメリカではクラブ活動はすべて地域社会が面倒を見るものだと思い込んでいた私は、正直なところ驚いた。

8時35分からのホリデイ校長先生の全校放送の後、第1時限のデイダー・ウッド先生の三角法の授業の時に、事前に準備していた「国際交流に関するアンケート」を実施して頂いた。この結果については、第2部のパーソナル・プロジェクトで詳しく報告する。アンケートの後、しばらく授業観察をした。先生に聞くと、このクラスの受講生徒は、この日欠席していた5名を含めて37名いると言う。昨日見学した授業は、障害を持つ生徒に対する授業を除いてすべて20～26名であったのと比較すると、極めて多人数であった。生徒は先生の指示に静かに耳を傾け、スクリーンに映し出された問題を黙々と解答していた。続いて別の数学の授業を見学したが、こちらは生徒数は22名。1つ1つ、問題の答えを確認しながら授業を進めていたし、取り組ませたプリントを回収していた点もよかったと思う。また、授業中、ある生徒の携帯電話が鳴った際にすぐ注意をしていたし、おそらく授業に遅れた生徒たちではないかと思われるが、授業半ばで、その2名の生徒を別の生徒に呼びに行かせたりしていた。

次に見学したのはコーラスの授業。男子生徒5名、女子生徒6名の計11名であった。男子をバス2名、テノール3名に分け、女子は全員ソプラノを担当し、混声3部合唱を行っていた。レイニースクールソングの他、国歌や聖者の行進などを聴かせてもらった。スクールソングの楽譜を頂いたので、是非、自分も歌唱できるように練習したいと思う。

4つ目のスペイン語の授業では、守口北高校（芦間高校）の生徒たちの様子、始業時刻や終業時刻、制服やクラブ活動などに関するさまざまな質問を受けた。

午前中最後は、リッチェル・ドンブロスキー先生のティーチャー・カデットのクラスであった。ここでは、将来教師を目指す生徒たちを対象とした授業が行われている。実は、前日にレイニー高校の窓口になって頂いているオールソン先生から、教師を目指すに当たっての留意点というテーマでこの授業でレクチャーをしてほしいとの要望があったので、昨日の夜に準備をして臨んだのだが、教室に行ってみると、日本における教員の仕事内容について教えてほしいということだったので、わかる範囲でいろいろと説明をした。授業以外の仕事として、朝のSHRや放課後の終礼、清掃指導、文化祭・体育祭や修学旅行などの委員会指導、クラブ指導、遅刻や服装の指導、学級懇談会や問題行動を起こした生徒への家庭訪問など、実に複雑、多岐にわたる仕事をこなしていると言うと、分業が当然とされているアメリカの教員の仕事内容との違いの大きさに、ほとんどの生徒が驚いただけではなく、ドンブロスキー先生もびっくりされていた。その他、私の勤める守口北高校（芦間高校）がどこにあるのかとか、生徒の放課後や休日の過ごし方、学校行事などについて聞かれたので、用意していた日本地図を広げながらそれらの質問に答えた。最後に私個人の趣味等についての質問があり、テレビのカラオケ番組に3回出場して優勝した経験もあると答えると、是非歌ってほしいということになり、得意のMy Wayを熱唱した。あれやこれや

のことでかなりの時間を割いて頂いて、準備していた守口北高校のプロモーションビデオを見てもらう時間がなくなったので、明日もう一度このクラスに伺うことを約束して教室を出た。

昼休みは、社会科のアダムズ先生、ホールデン先生といっしょに食事をとった。渡米前からレイニー高校に来たら是非尋ねようと思っていたことだが、レイニー高校が、1999年度と2000年度の過去2年間にわたってNC Exemplary School を受賞し、そして2001年度はHallmark School of Excellenceに輝いた、その一番の要因は何かという点について質問してみた。すると2人の先生とも口をそろえて、ホリデイ校長先生に変わって以来、学校の重点目標をアカデミックな方向にシフトするように全職員に対して通達が行われ、職員会議の場で繰り返し指示を出した結果、職員が一致団結してその方向へ変える努力を行ってきたからだと説明してくれた。この学校に勤務する教職員として、レイニー高校がHallmark School of Excellenceに輝いたことは大変誇りに思うし、また、ボーナスも出るので、とても喜ばしいことと考えていると言った。

午後からは、ROTCの授業を見学させてもらった。ROTCというのは、Laney's Air Force Junior ROTC Programのことで、この単位を修得して高校卒業後空軍に入隊すると、より高い収入が保証されると聞いた。ただし、実際には、Lt. Colonel Green 先生が担当している60名の生徒のうち、将来空軍に進むのは2～3人位であるとのこと。したがって、礼儀作法や協力し合う姿勢を身につけることもこの授業の存在意義と捉えているとおっしゃった。一通り訓練の様子を見せて頂いた後、私自身も行進に参加しないかと中佐から求められたので、滅多にない貴重な経験と思い、生徒たちに交じって行進した。大感激。

4時限目の2時から、ジャッキー・ニコルズ先生の英語の授業に伺って、守口北高校（芦間高校）について説明した後、さまざまな質問を受けた。そのうちの1つは、守口北高校とレイニー高校はどのような点で違うかというものであったが、授業中に生徒が積極的に意見の発表を行う点において両者の間に大きな差があると答えた。また、授業中に居眠りをする生徒は守口北高校にはいるかという質問に対し、「体育の授業の後には特に。」と答えると、「こちらでは体育の授業の後に限定しなくてもいるよ。」との生徒の言葉が返ってきた。

この後、ペギー・プライス先生の10年生を対象とした英語の授業と、ローラ・リッチ先生の12年生対象のシニア・プロジェクトの授業を見学した。リッチ先生の説明によると、シニア・プロジェクトの完成までには以下の4つの段階があるとのことであった。

1. Choosing one's topic and writing a research paper
2. Going out into the community and putting together a physical product
3. Giving presentation of one's research paper
4. Making a portfolio

8月22日（木）

この日も午前7時30分に、エンジェル・カヴェンダー先生がピックアップに来られた。今日は、姉妹校提携に関してホリデイ校長先生と話を煮詰めて頂くということで、米川先生と森田先生がレイニー高校に来てくださることになった。私の方は、第1時限目から、新聞発行の授業に出向いてインタビューを受けるなど、予定がぎっしりと詰まっていたので、提携については米川先生と森田先生にすっかりお任せすることになった。両先生には、何から何まで種々のサポートをして頂き、本当に感謝に堪えません。心より御礼申し上げます。

さて、第1時限目のカレン・マッカーティー先生のPublicationsの授業では、私に対するインタビューを新聞記事にするらしく、守口北高校（芦間高校）の生徒たちに関する事柄を中心に、20名ほどの生徒たちから実にさまざまな質問を受けた。

この後、英語科のペギー・プライス先生とシニア・プロジェクトや人権教育の実態について話を聞いた。まず、シニア・プロジェクトのねらいは、コミュニティーの中にある施設でも、製品でも、あるいはコミュニティーの中で起こった出来事でも何でもよいから、とにかく地域社会に関心を持つことにあるらしい。また、プロジェクトに取り組む過程において各自の研究の意味づけを行う中で、論理的思考力の伸長を図ることもねらいの1つとして含まれていると言う。そして地域社会との連携という観点から、このプロジェクトを完成させるためには少なくとも15時間、多い場合には60～70時間もの学校外でのワークが不可欠であると

のこと。評価は、文法的には英語科の担当教員が行い、専門的な内容に関してはメンターと呼ばれる校内で選定された指導教官が下し、さらに地域社会の人が3名加わって、1つのプロジェクトを多角的に評価していると説明された。

次に、人権教育の実態については、ノースカロライナ州が定めるカリキュラムの中には人権教育を施すための時間はなく、個々の教師が必要に応じて授業の中で行っているというのが現状とのこと。事件等が起こった場合には、当然、当該生徒に対して必要な措置や指導が行われるが、モラルに関しては、基本的には教会が担うべきものという認識が一般的なようだ。レイニー高校を含めて、今のノースカロライナ州においては、テストのための教科指導が何よりも優先されているということらしい。折しも、森田先生がトイレの中でnigger と落書きされているのを発見された。日本の高等学校における人権教育が非の打ち所もないほど完璧であると言うつもりなど更々ないが、現在のノースカロライナ州の教育のベクトルが余りにも学力に偏向しているのではないかという感じがした。

その後、ジュディ・マルティネズ先生の心理学の授業参観を終え、昨日見てもらうことができなかった守口北高校（芦間高校）のビデオを持ってTeacher Cadetの授業教室へと向かった。

そしてそこを出てから、Nova Net という非常にユニークな授業を見学させてもらった。ここでは、単位が取れなかった生徒を対象にコンピューターを使って自習をするシステムが採られていたが、この時は4名の生徒が熱心にコンピューターの画面を見ながら学習に取り組んでいた。なお、数学など、1人では学習ができないような場合は、教員がボランティアで教えに来てくれることもあるそうだ。

この後、教員控え室において、英語科のキャロル・ケリー先生からシニア・プロジェクトについて、ハンドブックを使ってレクチャーを受けた。

昼食を挟んで、午後は、マックス・フライヤー先生の世界史の授業を少し見た後、窓口担当になってお世話頂いたブレンダ・オールソン先生の世界の宗教の授業教室へ行き、守口北高校（芦間高校）のビデオを見てもらうとともに、ここでも最後にMy Wayを歌って、生徒たちから盛大な拍手をもらった。ほどなくチャイムが鳴り、生徒たちが教室を出てから、オールソン先生と今後のことについて打ち合わせを行い、森田先生とオールソン先生と私の3人で記念撮影をして、3日間にわたるレイニー高校訪問を終えた。

8月23日（金）

この日は午前8時から12時まで、26日（月）に行われるサマリー会議の準備を全員で行った。まずは、この日までに各自の宿題として準備しておくように森田先生から言われていたことなのだが、4日間の学校観察を通して感じたこと、気づいたことを、日米の教育における異質性と同質性というフィルターをかけて分析及び考察を加え、それらを簡潔にまとめてメモ用紙に書き込んでおいたものを、ホワイトボードに貼り付け、内容別に分類していく作業から始まった。各人が10個程度のメモ用紙を準備していて、それらを1つ1つ吟味し整理していく中で、以下の3点を骨子としてサマリー会議に臨もうということになった。

1．子供は子供（Kids are kids.）

2．しっかりしてまっか?

(Dependent or independent?)

3．何目指すん?

(What is focused in the education?)

午後は、1時20分にコーストライン・インを出て、銀行や郵便局へ寄った後、文房具や教具を扱っているTeacher's Aidへ行って、さまざまな買い物をした。その後一旦ホテルへ戻って、各自訪問先の学校で頂いたTシャツ等に着替えを済ませ、5時30分から始まるピッグ・ピッキング会場へと向かった。

ピッグ・ピッキングとは文字通り、豚の丸焼きのことで、ノースカロライナ州の名物であるらしい。地域の人々も集まり、私たちを盛大に歓迎してくださった。中にはわざわざおにぎりまで準備して持って来られた方もいて、久しぶりの故郷の味に大感激した。本当にありがとうございました。

パーティーを終えて、私たちはレイニー高校で行われているフットボールの観戦に出かけた。レイニー高校は昨年、ノースカロライナ州のすべての高校チームの中で、準優勝に輝いたそうである。しかし、この日は形勢が不利で、後日聞いてわかったのだが、試合結果は敗戦だったらしい。

その後、9時30分にホテルに戻り、少々疲れもあったが、10時から12時まで全員でサマリー会議の準備を

して眠りについた。

8月24日（土）

午前9時に、この日から翌日にかけての1泊2日の間、ホームステイさせて頂くことになったナイストロムご夫妻（Mike & Pat Nystrom）がホテルまでピックアップに来てくださった。この日は夕食時まで、森田先生と藤本先生、そしてそのホスト・ファミリーであるブレンダ・オールソン先生ご夫妻（Richard & Brenda Olson）の合計7人が行動をともにすることになった。

午前中は、有名なBattleship North Carolinaを見学に行き、戦艦ノースカロライナ号の艦内に入るとともに、その歴史について学んだ。

午後からは、ケープ・フィア博物館を訪れ、ウィルミントンのケープ・フィア地区の自然や文化、そして歴史を学んだ。ここには、マイケル・ジョーダンの発見ギャラリー（the Michael Jordan Discovery Gallery）もあって、ケースには彼の大学時代のバスケットボール関連の個人的なグッズも陳列されていて大変興味深かった。

夕食はオールソン先生宅でステーキをご馳走になり、歌を歌ったり、いろいろな話をしたりしながら過ごし、10時過ぎにナイストロムご夫妻の家に行き、その日あったことを書き留めた後、眠りについた。

8月25日（日）

午前8時に起床し、周辺を散歩して10時頃にブランチをとった。それから、翌26日（月）のサマリー会議での発表内容の英訳をパットさんにチェックして頂いたりした後、集合場所であるUNCWの駐車場へと向かった。そこで全員が落ち合い、ラレーへ移動開始。そして、4時ちょうどにホリデイ・インに到着した。すぐにサマリー会議の準備に取りかかり、夕食を挟んで、午後11時30分に、ようやく発表準備が完了した。

8月26日（月）

午前7時30分に朝食をとり、8時30分にホテルを出発して、予定の9時ちょうどにサマリー発表会場であるエクスプローリスに到着した。

今回のサマリー発表はすべて午前中に行うとのことで、その順番は広島地区（ECU）、大阪地区（UNCW）、鳴門地区（WCU）の順であった。大阪地区はもちろんのこと、どのグループも緊張の中、中身の濃い真剣な発表であった。

さて、昼食を終えて、午後2時15分から、私にとって生涯忘れることができない一大イベントが始まった。今回の訪問中に姉妹校提携に合意した2組の学校の仮調印式である。八尾市立東中学校とトップセイル・ミドル・スクール、そして我が大阪府立守口北高等学校・芦間高等学校とレイニー・ハイスクールの2組である。レイニー高校のドクター・リック・ホリデイ校長の被指名人であるブレンダ・オールソン先生と、本校の中尾直史校長の被指名人である私との間で、サマリー会議に出席された大勢の方々が見守ってくださる中、姉妹校提携の仮調印式が厳かに行われた。ブレンダ・オールソン先生を始め、米川先生、森田先生、ドン・スペンス先生、ブラッド・ウォーカー先生、レイニー高校のリック・ホリデイ校長先生並びに教職員の方々、そしてG. P. S. P. に関わっておられるすべての人に、衷心より感謝の意を表明申し上げます。

この後、予定より少し早めの午後3時にサマリー会議が終了し、4時から大阪地区の全員でショッピングに出かけて、そこで夕食を済ませ、9時30分にホテルに戻った。そして、国際電話をかけ、本校の校長に姉妹校提携の報告をして、ぐっすりと眠った。

8月27日（火）

午前8時50分にホテルを出発して、9時5分にエクスプローリス・ミドル・スクールに到着した。ここで数人ずつのグループに分かれ、私たちは8年生のマリアとハンナの2人に校内を案内してもらった。この学校は、6年生から8年生までで、各学年の在籍人数は56人だと聞いた。そして、ここには非常に優秀な生徒たちが入学してくるようで、例えば8年生の数学の場合、56人のうち5人が10年生レベルの特別クラスで学び、20人ずつの2クラス、計40人が9年生レベルの数学の授業を受け、8年生レベルの通常クラスで学ぶ生徒はわずかに11人だそうである。また、ノースカロライナ州のハイスクールのシニア・プロジェクトに近いと思われる、エグジット・プロジェクト（別名レガシィ・プロジェクト）という授業が8年生を対象に設けられているそうだ。クラブも、ドラマ、平和学習、クロスカントリーなどさまざまなものがあるらしく、

週に3回程度活動をしながら、家庭学習も平均して1.5～2時間、時には3時間もこなしていると聞いた。まさに文武両道を実践しているミドル・スクールという印象を強めた。施設面で興味を引いたのは、8年生に対してのみ自習室が与えられているという点である。そう言えば、レイニー・ハイスクールにおいても、最上級生の12年生だけが使用できる、シニア・コートヤードという空間が設けられていた。もしかしたら、ここノースカロライナ州では、下級生が最上級生に対して自然と敬慕の念を抱くように、学習環境面等において何らかの差を設けるようなシステムになっているのかもしれないと思った。

この後、エクスプローリス博物館を10時30分から12時まで見学し、そして、昼食をとってからノースカロライナ歴史博物館と科学博物館を文字通り駆け巡って、2時45分に、DPI（ノースカロライナ州教育委員会事務局）を訪問した。

DPIの図書館は、評価と教育研究の2つのセクションに分かれており、それぞれ見学させてもらった。館内にはたくさんの教科書などが収められていた。係の方の説明によると、ノースカロライナ州では、州内の最大の行政区画であるカウンティがまず教科書を4～5種類選定し、各学校はそれらの中から1つを選ぶシステムを採っているそうである。そして、副教材については、各授業担当の先生にその選択権が与えられていると言う。なお、教科書は日本の義務教育におけるような供与制ではなく、1年ごとの貸与制を採用している。また、ここでは図書館司書の研修も行っていると聞いた。そして、インターネットのホームページ（http://www.ncpublicschools.org）にアクセスすることにより、ノースカロライナ州のカリキュラムがいつでも見れることも教えて頂いた。

DPIを4時に出発して、4時30分にホテルに戻り、翌日早朝の出発に備えて荷造りをした。

8月28日（水）、29日（木）

午前5時30分にホテルのロビーに集合して、ラレー空港へと向かった。そして、さまざまな想い出を胸に、ラレー空港を9時5分に飛び立ち、10時30分にデトロイト空港着。そこから国際線に乗り換え、12時30分にデトロイト空港を出発し、日本時間の8月29日（木）午後2時50分に関西国際空港に到着した。そして、お世話になった米川先生、森田先生を始め、他の先生方と再会を約束して家路についた。